



龍山で生まれ育った片桐さんだからこそ、欠かさず行うことがある。それは…。「1年のいちばん最初にやること。それは、若水汲み。だね」元日の朝は毎年早起きして、家の近くの清水から水を汲む。そしてそれを使ってお茶を沸かしたり、雑煮を作ったりするという。「昔は火も起こしたんだよね、ガスなんかなかったから。そうそう、ガスが各家庭に入ってきたの

若水汲み。それは一年の最初にやる事

ケーションを図る場となっている。こんなやりとりもみられる。一人暮らし世帯や高齢者世帯が増えてきたこの集落。欠席が続く人がいると、「〇〇さんを最近見ないが」「そーいや、最近、足が悪くなってるね」などと話題になる。すると、ある人が「それじゃあ、ワシがちょっと〇〇して手伝ってやらか」となる。共助のつながりである。常会が、集落の「見守り体制」としての大きな役割を担っているのである。二つ目は年中を通したまつりごと。例えば、1月には新年の顔合わせ会、2月には山の神のお日待ち、3月にはお彼岸、6月には津島様のお日待と、集落では1月からの行事が立て続けに行われる。「昔から、みんなで集まってやってるんです」

「あの頃、中学の同級生は100人以上いたな。龍山中学は大嶺と瀬尻にそれぞれ教室があったからね。この集落にも多くの人が住んでいた。山も、人も、みんな元気で、活気があったね。でも今じゃ、山には、光が当たらず、集落では回覧板を回すのもひと苦労。隣家までの距離がどんどん遠くなってるね…一つ空き家になったと思ったら、また、あそこも空き家に…」

「おやじにもっとしっかり聞いておけばよかった。これはどんな意味があるのか、何のためにやっているのか、ってね」片桐さんは、文献などで一生けんめい調べたのだそう。「若いとき、働いているときには明日のことがいちばん大事でさ。山の始め？女の年取り？全然興味もなかったし。おやじが何か教え伝えようと声を掛けていたのかもしれないけど、その頃はた

は昭和40年代、テレビは30年代。昔は何でも自分たちでやっていたんだよね。世の中、便利になっただけでね、忘れたくないものってあるんだよね」そういって、片桐さんは、家の奥の方から何やらいろいろと取り出してきた。「これが、ひしゃく、これが桶、盆、それから…」見せてくれた道具の数々。これらを使って一年中の片桐家のまつりごとを一人で行っているという。1月から12月までのまつりごとを詳しく、そして分かりやすく教えてくれた。1月4日の朝には「山の始め」と言ってるね、御洗米や果物なんかを木の根っこに置いて、木を切る真似をするんだ。にゅうぎ（新木下写真参照）を作り始めるのもこのとき。6日は「女の年取り」と言ってる、正月が終わってほっと一息の日だね。7日は七草粥を作って一年の無病息災を願って食べる。この日に門松を寝かす（倒す）んだ。それから…。ふんふんと感心しながら12月まで聞いていくと、「おやじの見よう見真似だよ」と、片桐さんはほほほ笑いながら付け加えた。

伝えていくこと、伝えてもらうこと

後悔していることがあるという。「おやじにもっとしっかり聞いておけばよかった。これはどんな意味があるのか、何のためにやっているのか、ってね」片桐さんは、文献などで一生けんめい調べたのだそう。「若いとき、働いているときには明日のことがいちばん大事でさ。山の始め？女の年取り？全然興味もなかったし。おやじが何か教え伝えようと声を掛けていたのかもしれないけど、その頃はた

新しい年が始まる。すでに12月25日の「花迎え」を済ませた。歯の健康を願う「歯がため」用に秋から準備してきた干し柿も大丈夫だ。庭に作った門松に、もうすぐ初日が当たろうとしている。片桐さんの願いはひとつ。「今年も、来年も、再来年もずっと。自分も、家族も、集落のみんなも、ここで新しい年を迎え、すこやかに暮らせるように」

だるさいなあとしか思わなかったんだろうね」ちよつと嫌味な言葉を投げしてみた。息子さんにまつりごとの意味を伝えていくのか、と。すると片桐さんは笑った。「それは、分かるよ。聞くのは面倒だって。若いうちはそうだもん。知りたくなったら知ればいい。でもね、聞いてくれるときもあるから、その時にしっかり伝えられることは伝えていくよ」

守ること



▲家中の飾り付け（毎月1日）



▲鬼おどし（節分）



▲にゅうぎ（小正月）

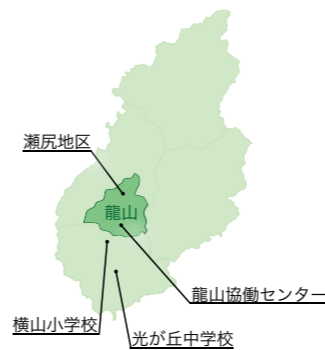


▲年中のまつりごとを使う道具を見せてくれる片桐さん

「あつたり地域の困りごとの相談をしたり、また、世間話をしたりして集落の人たちとのコミュニ

「あつたり地域の困りごとの相談をしたり、また、世間話をしたりして集落の人たちとのコミュニ

「あつたり地域の困りごとの相談をしたり、また、世間話をしたりして集落の人たちとのコミュニ



ここでまた、新しい年を迎える

田舎暮らしを照らす「光」case.5 「暮らしを次代へ『年中行事・まつりごと』」

暮らしが見える。感じる体温。
Tenryu + Plus